

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山口（桑島） 薫

山口（桑島）薫氏の論文「人権実践に関する人類学的研究——日本におけるドメスティック・バイオレンス被害者支援を例に」は、ドメスティック・バイオレンス（以下DV）をテーマにした人権をめぐる実践についての人類学的研究である。とくにDV被害者支援政策の実施現場に焦点を当てた記述と分析が行われている。本論文は、山口（桑島）氏が主に2005年12月～2009年9月にかけて、A市とB市において行ったフィールドワーク（参与観察）によって得られたデータに基づいている。

以下に、本論文の各章ごとの概要について述べる。第1章では、序論として、本論のテーマであるDVが解題され、このテーマに接近する本論の理論的枠組み——人権の人類学および政策の人類学——が提示される。第2章および第3章では、S.メリーが呈示した人権概念の「翻訳」の分析枠組みに依拠しながら、グローバルな女性の人権問題として定義づけられたDV概念が日本国内での制度的文脈においていかに展開されたかが記述される。すなわち、第2章では、DVをめぐる国内法と政策について、A市の元婦人相談員の語りをもとに、DV防止法に位置づけられる以前の婦人保護事業とは福祉行政の中でどのような位置づけにあったのか、婦人保護事業がどのようにDV政策に取り入れられ、婦人保護事業に携わる相談員達にいかなる影響を及ぼしたのかが述べられる。第3章では、2001年以降、DV政策が国レベルから地方公共団体へと「下りる」ことに着目し、B市のDV被害者支援施策の実施について検討されている。

第4章では、従来のDV観とは異なる視点から、「囲い込む力」の作用としてのDVの構造が論じられる。現行のDV被害者支援政策は、被害者を加害者から切り離し、自立へ向けて支援を提供するものであるが、実際には暴力の起こる関係から離脱できない、あるいはせつかく逃げてもまた戻っていくということが生じていることが述べられる。第5章では、市民団体プレイスが運営する、暴力被害を受けた女性を一時的に保護する一時保護施設での支援実践の実態が民族誌的に検討される。一時保護施設の最大の

目的は、入所している被害者の心身の安定と安全の確保、そのための管理を行うことである。そこには様々な葛藤やジレンマが生じることがあるが、プレイスでは、一方で厳しい管理を行いつつも、他方で女性の自己決定の尊重という原則を取り入れながら、グローバルな人権概念と自らの支援活動の間に一貫性を見出そうとしている。

第6章では、女性の人権の概念を構成する重要な要素である「自己決定」について論じられる。女性の権利運動において早くから謳われてきた自己決定は、自律的かつ主体的な、いわゆる近代西洋的自己観に基づいたものであるが、他方で、職員と被害女性との相互関係において、成長のプロセスとしての自己決定が行われていることが検討されている。第7章では、結論として、人権の実践を翻訳という分析枠組みで論じる中から明らかになったことが総括され、今後の人権をめぐる人類学の方向性が示唆されている。

以上の構成を持つ本論文の意義は、以下の通りである。第1に、従来人権が法解釈や制度分析を中心に研究されてきたのに対して、本論は人類学的なフィールドワークを踏まえて、人権を現場の実践から捉えようとしている点に特徴がある。日本における人権の人類学的研究はこれまでほとんど行われておらず、本論は先駆的な試みである。

第2に、人権という概念は普遍的に捉えられるが、本研究は、人権をグローバルから、ナショナル、さらにローカルな次元にいたる「翻訳」のプロセスとして捉えている。ここで言う翻訳とは、国際的な人権概念のレトリックや構造をローカルな文脈へと調整、適用することを意味し、この翻訳プロセスへの注目を通して、グローバルな人権概念が日本の文脈においていかなる具体的形をとってきたのかを明らかにした。

第3に、女性の人権を構成する重要な要素の一つである「自己決定」について、グローバルな人権概念には収斂しない自己観に基づいた実践が行われていることを指摘した。すなわち、現場の実践においては、自律的で主体的な、近代西洋的な自己観ではなく、相互関係に規定された自己観に基づいた支援が展開されている。このような長期的かつ相互関係における自己決定のプロセスが被害を受けた女性たちが生きる力をつけるための支援としてきわめて重要である点を明らかにした。

審査においては、本論文の調査地の表記法、DV 概念、翻訳概念などについて疑問や批判的なコメントも提出された。しかし、本論文の持つ価値は、十二分に高いものがあり、文化人類学の研究に対して重要で貴重な貢献であると判断された。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。